

【第 24 回パラグアイ便り】



2016年日本人移住80周年記念イベント

『 演劇“歩む道”の上演 - 日本人移住 80 年の軌跡を描く - 』



(写真：“歩む道”パンフレット)

今年は日本人パラグアイ移住 80 周年。  
本『パラグアイ便り』では、この 80 周年が日系人社会を超えてパラグアイ各界からの幅広い関心と共感を呼び、さまざまな団体が企画する各種の行事が実施されていることを報告してきました。

今回のもう一つの特徴は世代的な広がり、すなわち若い世代の主体的な参加です。80 年前の昭和 11 年にラ・コルメナに入植した一世の方もまだご健在ですが、他方、戦後移住といえどもその入植から 60 年近くを経過し、家も道路も電気もないゼロの状態から手斧でジャングルを切り開いた、そうした苦闘・苦難の記憶は次第に遠くなっていきます。

戦後の日本人移住事業は筆者からみれば同時代の出来事ですが、その中で築かれてきた日系社会で生まれ育った若者たちには、こうした開拓の時代は写真で想像するだけの「歴史」になっています。



(写真：別離の出航とパラグアイとの邂逅)

この先人の記憶をしっかりと受け継ぎ、移住 80 年の軌跡や時々の先人の思いを演劇という形式で表現しようという若者た

ちの試みが、現代演劇【歩む道】の制作につながり、7月9・10日の両日に「パ日・人造りセンター」大劇場の舞台上で実現しました。

本演劇は日系3世の若手演劇人・田中幸子が企画し、脚本作りから舞台装置、振付や音楽まで、すべてを統括して演出したもので、出演者12名はすべて演劇素人の当国の日系若者でした。

舞台は開幕から、アルパ、打楽器、キーボードによる生演奏が舞台進行をリードしていく中で、パラグアイ移住の決意、家族との別れ、出航する港での別離、希望と不安相半ばする航海中の日常生活、パラグアイ到着時の喜び、現実の開拓の苦難、日本敗戦の悲報、そして新たな出発、こうした起伏にとんだ歴史が刻まれていきます。



(写真：舞台大画面での移住一世関淳子さんの回顧談)

台詞は日西両語を使い分けつつも、モダンバレエのような振付を取り入れた体全体の動作で表現することで、感情が観客に肌で伝わっていきます。また二ヶ月かかった船中での生活やラ・コルメナ移住地を襲い田畑を壊滅させたイナゴ襲来の模様については、移住一世の関淳子さんの回顧談が大画面で映しだされて、静止した舞台を包むように語りながら次の展開に繋いでいきます。

またイグアス移住地の太鼓グループによる太鼓と笛演奏を効果的に挟み込むことで、不安、希望、喜び、悲しみを見事に描き切りました。そして演劇の最後には、日系三世の若手テノール歌手が唱歌「故郷」を日本語で歌い上げて2時間の叙事詩の幕を閉じました。

両日で観客800人が鑑賞しましたが、日系・非日系の違いや世代の違いという枠を超えて、すべての人の心を打つ80周年にふさわしい素晴らしい舞台公演となりました。



(写真：太鼓演奏。左は航海生活、上は村祭り。)

制作総監督の田中幸子は、ラ・コルメナ移住家族の三世にあたる27歳の新進の演劇人です。かねてより移住の歴史を演劇にする構想を抱いており、構想実現にむけて今年2月から、先ず移住者先達への聞き込みから始めて徐々にストーリーを固め、さらに若手の出演者を募り、彼らの意見も取り入れながら舞台演出に工夫を重ねていきました。



バックの楽曲はこの舞台のために作曲されたもので、アルパ、打楽器、キーボード3人のプロ奏者によるモダンな音楽が舞台

(写真左：原爆投下と日本の敗戦。 右：イナゴ襲来による田畑の壊滅)

進行を引っ張り、演劇に多彩な表情を与えます。

舞台の最後を飾ったテノール歌手は、アスンシオン国立大学音楽科在学中の日系三世エリアス・ベルドゥン・タナカ君。彼は朗々と「故郷」を日本語で歌い上げましたが、その間に移住先人たちの思い出の写真が一つずつ静かに舞台上に運び込まれ、観衆の感動を誘いました。



(写真左：先人達の写真に囲まれた独唱。  
右：舞台袖での生演奏)

本舞台の公演に先立ち、当地有力“ウルティマ・オラ(UH)”紙が別冊記事で【歩む道】を紹介していますが、その中で、『日系の若者たちは、先人の歴史を掘り下げながら、それぞれ個人の、また日系社会全体のアイデンティティを演劇の世界で総括し、舞台作品【歩む道】として実現させた。』と述べて、芝居作りに加わった若者たちの写真と、彼らの思いを紹介しています。

そして最後に、『この舞台は、今は亡き人々、今生きている人々、そしてこれから生まれてくる人々、すべてに対する賛歌です。』との田中幸子の言葉でこの記事を終んでいます。

冒頭述べたように、今回の 80 周年事業は、単に過去を振り返るだけでなく、若い世代に移住の歴史や誇りを繋いでいく意義もあります。今回のこの演劇は、その制作の過程から仕上がりまで全て二世三世の手



(写真：UH紙の【歩む道】紹介記事)

によるものですが、その成果を最も喜んでいたのが彼らの父母や祖父母であったことは間違いありません。



(写真左：終幕の挨拶。右：上演記念プレートを手にする田中幸子と出演者ほか。)

《注》 なお7月の公演は 9・10 日の2日だけでしたが、今回の成功を受けて9月にも再演される方向で検討されています。

(上田善久 大使館 2016 年7月)